1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	0471300582
法人名	社会福祉法人　宮城福祉会
事業所名	グループホーム　うぐいすの里こもれびの家
所在地 （電話番号）	宮城県栗原市鶯沢南郷広面46 （電　話）0228-55-3889

評価機関名	NPO法人　介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会
所在地	仙台市宮城野区榴岡4－2－8　テルウェル仙台ビル2階
訪問調査日	平成　20 年　11月　10 日

【情報提供票より】（　20年 10月 26日事業所記入）

（1）組織概要

開設年月日	平成　17　年　4　月　1　日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18人
職員数	15　人	常勤　15 人，非常勤　　人，常勤換算　15　人	

（2）建物概要

建物形態	併設／〇単独	〇新築／改築
建物構造	木造造り	
	1 階建ての　　階　～　　1 階部分	

（3）利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃（平均月額）	20,400　円		その他の経費（月額）	15,000　円
敷　金	有（　　円）		〇　無	
保証金の有無 （入居一時金含む）	有（　　円） 〇　無		有りの場合 償却の有無	有／無
食材料費	朝食	280　円	昼食	250　円
	夕食	350　円	おやつ	120　円
	または1日当たり	1，000	円	

（4）利用者の概要（　10月　26日現在）

利用者人数		18 名	男性	2 名	女性　16 名
要介護1		1　名	要介護2	4　名	
要介護3		7　名	要介護4	6　名	
要介護5		名	要支援2	名	
年齢	平均	84.4 歳	最低	77 歳	最高　93 歳

（5）協力医療機関

協力医療機関名	栗原市立鶯沢診療所（内科・歯科）

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

ホームは社会福祉法人宮城福祉会が平成17年に開設した2ユニットで知的障害者（定員4名）との共生型グループホームである。栗駒山を背景として敷地も広く、建物も余裕のあるゆったりした間取りになっている。敷地内に同一法人の特養ホームがある。このホームの特徴の一つは、地域との関係を深めるために意識的に働きかけていることである。保育所や小、中学校についてもボランティアとして受け入れるだけでない。ホームから学習参観とか、こちらから出向いていくという姿勢である。それだけに職員は近隣の人達に対しては、日常の挨拶一つにしてもおろそかにしていない。市からもホームが社会資源として重視されていることが感じ取れる。すでに運営推進会議のメンバーからも提起を受けているが、地域防災体制などについて、具体的役割を市や地域と検討するなど、期待に応えていただきたい。日々のケアについては、入居者の思いを汲み取り叶えられるよう努力している。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	**前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況（関連項目：外部4）** ①地域密着型サービスを認識した理念については、ユニット毎に職員が検討し「住み慣れた地域の中で」と改定した。②運営推進会議については、メンバー構成や提言は良いが、開催頻度については、検討していただきたい。③終末期については指針を策定し、家族との話し合いに入れるようにしていただきたい。④災害対策については改善がみられた **今回の自己評価に対する取り組み状況（関連項目：外部4）** 自己評価は項目にそって、ユニット毎に検討した。出される意見、考え方には年齢、経験によって微妙に差があり、リーダーとして勉強させられたという。外部の風を通し、ひとりよがりに陥らないようにということで、外部評価も全員に徹底し、共有されている。
重点項目②	**運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み（関連項目：外部4，5，6）** 運営推進会議のメンバーは、市の職員、区長、民生委員、地域包括支援センター、小、中学校、保育所、家族代表、利用者と地域との絆を強くするための布陣となっている。ホームの催しが、メンバーの協力で成功した例もある。開催頻度が少ないのは地震の影響もあったと推察するが、逆にそれを会議のテーマにするなど一工夫していただきたい。
重点項目③	**家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映（関連項目：外部7，8）** 家族は本人が入居してからの変化について、よく話をするようになったとか、お風呂で歌を歌うようになったとか、職員が明るく誠実に対応していることをよく把握し感謝している。運営推進会議のメンバーにもなっている。入居者のケア担当者による「お便り」には写真も同封している。面会時の職員の状況説明も評判が良い。
重点項目④	**日常生活における地域との連携（関連項目：外部3）** 施設の敷地内の通路は、保育園の子供達も利用している。小学校への参観、保育園のお遊戯会など、身近な触れ合いを大切にし、ボランティアでは月1回のお茶会、はっと料理や、冬至南瓜、その後の踊りの会などがある。それだけに職員は日常の挨拶、声掛けを大切にしている。

2. 評価結果（詳細）

（ ▭ 部分は重点項目です ）

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅰ．理念に基づく運営					
1．理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	法人としての事業の目的（理念）の他に、ユニット毎に職員が検討して作り上げたそれぞれの理念がある。「住み慣れた場所を大切に、家族のように」（ユニットなでしこ）、「住み慣れた地域の中で笑顔と安心の生活環境を」（ユニットれんげ）である。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	職員自らが話し合い検討を重ねて作り上げた理念なので、日々のケアの中で折に触れ、感じを新たにして仕事に生かしている様子は職員からの聞き取りでも確認できた。		
2．地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	施設の敷地内の通路は保育園の子供達も利用している。敬老会、小学校への参観、保育園のお遊戯会など、身近な触れ合いを大切にし、ボランティアでは月1回のお茶会、はっと料理や冬至南瓜、その後での踊りの会などがある。それだけに職員は日常の挨拶、声掛けを大事にしている。		
3．理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価の項目に沿ってユニット毎に検討した。出される意見、考え方には年齢、経験によって微妙に差があり、リーダーとしては勉強させられたという。外部の風を通し、ひとりよがりに陥らないようにということで、外部評価も全員に徹底し、共有されている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議委員には、市の職員、区長、民生委員、地域包括支援センター、小中学校、保育所、家族代表、入居者と、地域との絆を強くするための布陣となっている。委員からの協力で成功した催し事もある。地震による影響は推察できるが、開催頻度は改善していただきたい。	○	グループホームでの行事の企画や、地域との関係を密にするための橋渡しをお願いするなど、機会をとらえて2か月に一度の定期開催に向けて努力していただきたい。

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市からはグループホームの運営推進会議委員として参加している。ホームからは市主催の身体拘束に関する研修会や、高次脳機能障害研修に参加している。日常的には支所の保健師や地域包括支援センターを通じて関係は良い。		
４．理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	毎月入居者の健康状態や暮らしぶり、行事での様子などについて、担当者が「便り」で知らせ、金銭出納も定期的に報告している。また、誕生祝い、行事の写真も送っている。2か月に1回発行している「ホーム便り」には職員の異動についても掲載し紹介している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居してからの変化、よく話をするようになったとか、お風呂で歌を歌うようになったとか、家族は、職員が明るく誠実に対応していることをよく把握し感謝しており、運営推進会議の委員にもなっている。会議では要望や意見を忌憚なく発言できる雰囲気があり、第三者委員も選定している。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員と入居者及び家族の馴染みの関係の大切さを法人としてよく理解しており、離職は少ない。法人内の異動はキャリアアップとケアのマンネリ化を防ぐ手立とし、最小限にとどめている。		
５．人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修会には正職員、臨時職員を問わず参加することとしている。法人内での研修会も活発である。市主催の研修や、NPO県グループホーム協議会の実践報告会、同北ブロックの職員交換研修会などにも参加している。職員の資格取得受検を奨励し、支援もしている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	NPO県グループホーム協議会の会員である。同協議会の主催する研修会や事例発表会に出席し、情報交換を行っている。法人内の他のグループホームとの情報や意見のやりとりも活発である。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気に徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居前に日帰りや宿泊などの体験利用をしていただいている。また、家族の気持の変化も見逃さないようにしている。入居予定者、家族の不安要素を聞き取り、不安を一つ一つなくしてゆく努力をしている。そのためにもホームの雰囲気や職員に馴染んでもらうことが大事だと考えている。		
2．新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	入居者一人ひとりの得意とする所を引き出すようにしている。食事の盛り付け、後片付け、裁縫、畑仕事などである。若い職員ははっと作りなど、料理を教わったりしている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1．一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人や家族からできるだけ要望を聞き出すようにしている。馴染みの店で財布からお金を出して買い物をすることとか、お店で好きなものを食べることなどである。職員は、勤務体制などで制約せざるを得ない場面では、胸を傷めている。		
2．本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映した介護計画を作成している	本人や家族の意向にケアマネジャー等の意見や情報を取りいれ、総合的な援助方針を立て、長期、短期の援助目標を設定している。課題策定の際はできるだけ本人の言葉で記入するなど東京センター方式を取りいれている。ケアプランは家族に目を通していただき、サインもいただいている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	毎月カンファレンスで検討をし、定期的には3か月に1度新たに作成している。入居者の状態に変化が生じた場合はその都度見直しをし、新たに作成している。いずれの場合も職員が気付きやアイディアを出し合い個別、具体的な計画を目指している。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
３．多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	通院や理美容に付き添っている。面会の少ない入居者が自宅の様子を見たがっている場合など、自宅訪問支援を行っている。夜間や緊急の場合に、同系列施設の看護師を通じて医師の指示を受けることができる。		
４．本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者、家族の希望するかかりつけ医、医療機関で受診することを支援している。定期的に鶯沢診療所から往診を受けている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	入退院を繰り返す入居者も出てきているので、重度化に対して家族、医療機関、ホームの連携についての検討の時期に入ったと判断している。ターミナルケアの経験を有する他のグループホームや研修を通じて、情報を集めている段階である。	○	早い段階から入居者本人や家族と話し合う機会を作り、医療機関との連携も含め、重度化に際しての指針を策定し、職員等との共有や理解を図り、グループホームでの支援方法を家族に示せるような体制作りに努力していただきたい。
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援 １．その人らしい暮らしの支援 （1）一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	職員が入居者に接している様子をみても、、自然に相手を敬い、親しみの中で「心地よく過ごしていただく」という気持が汲み取れた。個人に関する書類は個人情報として注意して扱っている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日中は特に決まったプログラムはない。その日の天気、その人の体調にそって、自然の流れの中で調理や裁縫、散歩、歌など様々である。散歩についてもその日によって入居者の思いを叶えるために苦心する日もあるが、管理者は改善の方法はあるとしているので期待したい。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（2）その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	献立は同じ特養ホームの管理栄養士に相談し作成している。入居者の状態に応じて、きざみ食、おかゆなども提供している。食事時は和やかに楽しく食事ができるように、席順にも気を配っている。誕生日には、その方のリクエストに応じて職員も一緒に食卓を囲んでいる。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	毎日入浴できることを原則としている。しかし、入居者の方で曜日や時間に希望の傾向が出ていて、職員もそれに合わせている。入浴したがらない人にはケアプラン作成の段階で検討している。1対1での支援を重視し、そこで得た情報等の共有に努め、入浴での入浴剤使用など楽しむ工夫も行っている。		
（3）その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	調理や食器拭きを手伝ってもらったり、野菜を栽培、収穫し、職員がはっと料理を教えてもらったりしている。保育園の園児の立ち寄りも楽しみだし、ホームで紙飛行機教室を開催し、小学生と一緒に飛ばしたりしている。地域には入居者の知り合いも多く、交流の場となっている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	散歩などの外出は、車椅子使用の入居者には特に気を使っている。保育園、小、中学校については、それぞれの行事毎に外出の機会として捉え支援している。また買い物を楽しんでもらい、自宅の様子をみたい人や、墓参りへの支援も行っている。		
（4）安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	日中は鍵を掛けていない。身体拘束との関連から鍵を掛けることが、入居者にとってどういう意味をもつかということを職員は理解している。一人ひとりの行動パターンを把握し、所在確認を行ないながら、鍵を掛けないケアに取り組んでいる。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	消防署の立会いで年に2回、夜間想定も含め避難訓練を行っている。6月の岩手、宮城内陸地震での勤務者は経験を全体会で発表し共有している。運営推進会議での提言もあり、地域とのより具体的な協力が課題である。		

外部	自己	項　目	取り組みの事実 （実施している内容・実施していない内容）	（○印）	取り組みを期待したい内容 （すでに取組んでいることも含む）
（5）その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立は同じ特養ホームの管理栄養士が作成し、摂取カロリーやバランスもきちんと把握されている。一人ひとりの身体状況に合わせてきざみ食やおかゆも提供している。体重測定も定期的に行っている。		
2．その人らしい暮らしを支える生活環境づくり （1）居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関先にスロープがあり、花や植木で開放的な雰囲気もある。音や光の取り入れも適切で、換気装置が24時間働き、空気のよどみや臭気は一切ない。硝子戸と居室の間は縁側となっており、布団干しや昼寝の場所となっている。冬の長い東北地方としては理想的な造りである。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の遺影などを飾り、お茶や水を供えることを日課としている入居者もおり、各居室それぞれに個性が感じられた。家族には使い慣れた家具や日用品の持ち込みを働きかけてもいる。		